



図 3

12才7ヶ月 Stage VI

左上、 装具なし

右上、 装具装着

(改良型)

左下、 装具なし

側弯46°

右下、 改良型装具

側弯20°

## 5、「いざり」および「四つ這い」のための移動用車 第2報—「四つ這い」のためのクローラー

国立療養所下志津病院

齊 藤 篤 松 下 登

齊 藤 敏 郎

筋ジストロフィー症児には病態進行と共に「四つ這い」や「いざり」移動に対する移動用具または移動用車の適応が考えられる。前回は「いざり」児に対しキヤスター付き扁平な座板を考察しその有用性を報告した。今回は「四つ這い」に際しクローラーに類似する移動用車を試作した。「四つ這い」移動に際し Stage 5 以上では肩関節や股関節部構成筋群は顕著に荒廃し、大関節は加重に際し亜脱臼を示すようになり、移動距離も減少し移動後は休息を要するようになる。これに対し、既製のクローラーを用いその有用性を検討してみた。その結果移動はかえって不能に

なると共に胸部の圧迫による苦痛を訴え使用に耐えられなかった。—

問題点としては、前進に際して仙椎部を支点として頭部の振り子状運動に合はせた上肢および下肢の交叉運動が行われるが、脊柱の前弯の増強された上下運動も加味されている。このことから、クローラーの作製上、上下運動および左右への安定した弾力性のある円滑な可動性に注目すべきことが判明した。この移動車の前方支脚は両上肢の運動に際し、支障のないように単脚として上下運動と共に左右への傾きも行われるようなスプリングをクッションとし、体重によりその浮き沈みを加減出来るようにした。また胸部および腹部への圧迫も軽減するようにスプリングによる上下の浮き沈みが行われると共に、左右への振動にも応じられるようクッションを取り付けた。

また後脚は両下肢が前進、後進に際し、障害にならないよう側方に弯曲させて固定させた。後脚のキャスターも上下運動がわづかながらも行われるようにスプリングを取り付けるよう考察した。

患者への試用は、「四つ這い」児のうちでも年齢および病態の進行に合わせて行った。その結果は試作クローラーの円滑で摩擦の少ないキャスターの取り付けにもよるが、微妙な体幹の振り子状運動に合った作動性が要求され、必ずしも快適な移動性が得られなかったが、前進よりも後進に際し、より作動性に優れていることは興味深い。

この移動車の有用性は、「遊び」としての使用、この移動用クローラーの特性を理解して、その作動を習熟することにより日常生活動作を行っている病棟内の平坦な床面での併用が考えられる。

今後の課題としては電動移動車の開発を検討している。

図1



図1

「四つ這い」用移動車の使用

注：胸部および腹部での支持性が増加すると脊柱の前弯の減少と共に再上肢の支持を増加させ反張位を増強させるよう努力する。上下運動と共に左右への円滑なスプリングによる運動性が要求される。

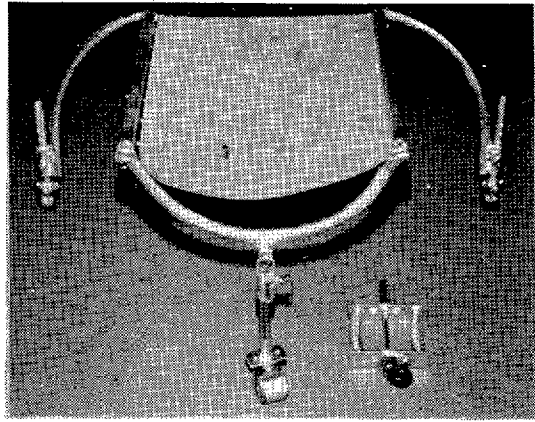
図2

「四つ這い」用移動用車

前脚および後脚にはスプリングによる上下運動を支えている。取りはづしである前脚は上下、左右運動も与えている。

胸部および腹部のクッションは、下はスプリングにより支持されて上下の浮き沈みを調節する。

金属枠は軽合金が重量の関係で望ましい。



## 6. 電動式椅子便器の改良

国立療養所西多賀病院

菊地 伊三郎      沖田 ふみ子  
長谷川 信雄      川村 とよ子  
佐藤 弘子

### 〔はじめに〕

当院には、PMD患者の病棟が4病棟、ベット数は160床ある。年齢は、満5才から65才まで体重は18kgから76kgと幅が広く重度の患者が多数いる。そのため、看護業務の内容及び看護力の過重など深く問われているのが現状である。

業務内容は殆んどが、日常生活の援助である。その中でも排泄に関する援助は、看護力の比重の大半を示めており、大きな問題と言っても過言ではない。そして又患者の多くは、病苦よりも自分で自分のことができないことにいらだちと苦しみを訴えている。

患者ケアに当たる看護者にとって、より容易に、かつ援助しやすく、患者にとっても容易に援助を依頼することができるように、種々の看護機器の工夫、改良がなされている。

私達は、その中で、看護力の大半をしめている排泄についてとりあげ、患者がより安楽に、又看

↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

筋ジストロフィー症児には病態進行と共に「四つ這い」や「いざり」移動に対する移動用具または移動用車の適応が考えられる。今回は「いざり」児に対しキヤスター付き肩平な座板を考察しその有用性を報告した。今回は「四つ這い」に際しクローラーに類似する移動用車を試作した。「四つ這い」移動に際し Stage 5 以上では肩関節や股関節部構成筋群は顕著に荒廃し、大関節は加重に際し亜脱臼を示すようになり、移動距離も減少し移動後は休息を要するようになる。これに対し、既製のクローラーを用いその有用性を検討してみた。